

【ポスター発表】

児童養護施設退所者の大学等進学について

—進学に至った経緯から—

○ 中部学院大学短期大学部 平松喜代江 (6444)

キーワード：児童養護施設退所者、大学等進学、社会資源

1. 研究目的

児童養護施設退所者の進路は、就職 69.8%、進学 22.6%、その他 7.6%に対して、全国の高卒者は就職 16.9%、進学 76.9%、その他 6.3%(厚生労働省,2014)で、進学率に大きな差が生じている。しかし、少数ながらも高校卒業後に進学を実現している子どもがおり、「児童養護施設入所児童等調査結果の概要」(厚生労働省,2013)によると、児童養護施設の子どもの大学進学希望率は 27.0%で、進学率は 11.4%となっている。そこで、児童養護施設退所後に大学等進学に至った事例において、どのような経緯があって進学につながったのかをみることにより、児童養護施設退所者の高等教育の進路を保障するための示唆を得ることを目的とする。

2. 研究の視点および方法

調査協力者 大学・短大へ進学した 20 歳代の 3 名の児童養護施設退所者を調査協力者とした。そのうち、大学へ進学したもの 1 名、短大に進学したもの 2 名であった。

調査時期 調査は 2015 年 8 月から 10 月の期間に実施した。

調査手順 3 名の大学等に進学した児童養護施設退所者に面接調査を実施した。面接の具体的な手順は、半構造化面接の形式をとり、約 1 時間行った。面接は本人の了承を得て IC レコーダー (V-822-WHT、OLYMPUS) に録音した。

調査内容 児童養護施設での生活、大学在学中の生活、現在の生活について 3 つに分けて面接調査により聞き取りを行った。

データ分析 録音された面接調査による聞き取りを再生して逐語録を作成した。作成された各協力者の逐語録を、生活状況、個人状況、社会状況の 3 つの状況に分類し、時系列に並べ直し、大学等への進学に至った経緯を調べた。

3. 倫理的配慮

本研究に関わる調査は、日本社会福祉学会研究倫理指針を厳守した。調査に際しては事前に書面にて調査の趣旨および匿名性とプライバシー保護を遵守すること、研究目的以外で調査結果を利用しないことを説明し承諾を得た。また、調査結果においては検討・分析に際して個人が特定できないように配慮した。

4. 研究結果

協力者 A 子どもの頃は、ケーキ屋さんになるという夢をもっていたので、製菓の専門

学校に行きたいと思っていた。中学2年の終わり頃に児童養護施設に入所となった。新しい環境に打ち解けられないAに児童養護施設職員（以下、施設職員と示す）は粘り強く関わり続けた。このような施設職員との関わりから、Aは高校2年の頃に、社会福祉を学びたい気持ちが芽生え始めた。そして、高校3年の時に、施設職員から社会福祉を学ぶ大学を紹介された。その後、施設職員から大学進学の際の経済面（奨学金）での情報提供を受ける。あわせて、同じ児童養護施設退所者のなかにも進学したものがあることを知り大学進学へ【気持ちが揺れ始めた】。そして、施設職員から大学進学後の生活の見通しについて助言された。

協力者B 子どもの頃の夢はなく、今のことだけを考えて生活していた。中学2年の終わり頃に児童養護施設に入所となった。入所した頃は、【中学を卒業して就職かなと思っていた】。その後、施設職員からの励ましにより高校へ入学したが、【目標もなく、とにかくただらして過ごしてた】。そして、暇を持て余していた高校生活をみて施設職員から勧められた高齢者施設へのボランティアへ複数回参加した。その時、利用者の方から【「また来てくれたの？」と自分を覚えてくれていたことがすごく嬉しかった。この仕事いいなあと思うようになった】。その後、この仕事をするためには資格取得が必要であることを施設職員から聞き、進学のための受験勉強をはじめた。そして、施設職員から奨学金の申請や大学進学後の一人暮らしへの情報提供がなされた。

協力者C 【人生の半分は施設にいたよ】と話すCは、入所期間が11年におよんでいた。そして、自分のことを大切にしてくれている施設職員をみて、【周りの大人といたら、職員さんしかいなかったから、施設職員に自然と憧れた】。その後、この仕事をするためには資格取得が必要であることを施設職員から聞き、受験勉強をはじめた。そして、高校時代のアルバイト代を貯めた貯金の使い方と奨学金の申請、大学進学後の保護者との関係について助言された。

5. 考察

本調査協力者に共通することは、最初から進学を希望していたわけではなかったことである。進学する動機となったのは、施設職員への憧れ、人に喜ばれる体験、大学進学への肯定的なメッセージ、退所後の生活への具体的な見通しなど様々であった。これらの動機に影響を与えたのは、施設職員の存在である。そして、様々な社会資源を紹介し実際に活用できるまでには、施設職員の支援が大きな存在となっている。それは、【本当にたくさんの書類や作文を書きまくったよ。大変だったけど、職員さんが一緒にやってくれたからできた】というBの言葉からもうかがえる。これらから、児童養護施設で生活している子どもたちにとって、施設のなかで信頼できる職員がいるか、さらに職員が社会資源の情報を把握し活用まで導いていけるかどうか、子どもの進路を大きく規定することが示唆される。これらから、児童養護施設退所者の高等教育の進路を保障するためには、児童養護施設がもつ進学に関する社会資源によって格差が生じない対策が必要と考える。